

金屋下別所遺跡Ⅱ

— A地点の調査—

2009

本庄市遺跡調査会

かな や しも べつ しよ い せき
金屋下別所遺跡Ⅱ
— A 地点の調査 —

2009

本庄市遺跡調査会

序

本庄市は、かつて中山道一の繁栄を誇った宿場町として、また、国学者塙保己一
生誕の地として広く知られるところです。そうした歴史的な背景と文化的風土を持
つ本庄市は、また多くの埋蔵文化財にも恵まれ、市内には旧石器時代から近代に至
るまでのさまざまな遺跡が分布しています。

本書は本庄市児玉町金屋に所在する金屋下別所遺跡の発掘調査成果を記録したも
のです。金屋下別所遺跡では、これまでの調査でも縄文時代の土器や石器、古墳時
代の土師器、古代の溝や土坑群さらには中世の焙烙や「かわらけ」など多彩な遺構・
遺物が検出されており、あらゆる時代の人々の生活痕跡を残す貴重な遺跡として知
られているところです。今回の調査においても、新たに土坑群の一角と成すと考え
られる遺構が発見され、遺跡の性格を推定する上で重要な資料を得ることができま
した。

貴重な文化遺産を長く後世に伝えていくことは、現代に生きるわたくしたちに与
えられた責務であり、歴史を明らかにすることはよりよい未来を築くための手掛か
りとなるものです。今後は本書が学術研究の発展に寄与するとともに、生涯学習の
場に広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書の刊行にいたるまで、文化財の
保護に対する深いご理解を賜りました古家武光氏をはじめ、調査に際してご指導、
ご協力を頂きました方々、直接作業の労にあたられた皆様に衷心よりの感謝を申し
上げます。

平成 21 年 3 月

本庄市遺跡調査会

会 長 茂 木 孝 彦

例 言

1. 本書は埼玉県本庄市児玉町金屋字下別所 724-1 に所在する金屋下別所遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は古家武光氏の住宅建設に伴う事前の記録保存を目的として、本庄市遺跡調査会（旧児玉町遺跡調査会）が実施した。調査対象面積は約 10 m²である。
3. 発掘調査、整理調査に係る詳細は以下のとおりである。
 - ・発掘調査期間：平成 5 年 9 月 13 日 ～ 平成 5 年 10 月 30 日
 - ・発掘調査担当者：徳山 寿樹（旧児玉町遺跡調査会 調査員）
 - ・整理調査期間：平成 20 年 11 月 1 日 ～ 平成 21 年 3 月 15 日
4. 発掘調査から本書刊行に至る経費は、古家武光氏が負担した。
5. 整理調査は有限会社歴史考房まほらに委託し、笠原仁史が担当した。
6. 本書の執筆は I・V を本庄市教育委員会事務局が、その他を笠原が担当し、編集は笠原が担当した。
7. 発掘調査資料・出土遺物等、本調査に関する全ての資料は本庄市教育委員会において保管・管理されている。
8. 発掘調査から報告書刊行に至るまで下記の諸氏・諸機関に御助言・御指導・御協力を賜りました。（50 音順・敬称略）
長井正欣 山際哲章 有限会社 毛野考古学研究所
9. 本調査に本庄市遺跡調査会の組織は以下のとおりである（平成 20 年度）。

会 長	茂 木 孝 彦	本庄市教育委員会教育長
理 事	清 水 守 雄	本庄市文化財保護審議委員
	佐々木 幹雄	〃
	丸 山 茂	本庄市教育委員会事務局長（会長代理）
監 事	八 木 茂	本庄市監査委員担当副参事
	小 谷 野 博	本庄市参事兼会計課長
幹 事	儘 田 英 夫	本庄市教育委員会文化財保護課長（事務局長）
	鈴 木 徳 雄	〃 課長補佐兼文化財保護係長
	太 田 博 之	〃 埋蔵文化財係長
	恋河内 昭彦	〃 埋蔵文化財係主査
	大 熊 季 広	〃 埋蔵文化財係主任
	松 澤 浩 一	〃 埋蔵文化財係主任
	松 本 完	〃 埋蔵文化財係主事
	的 野 善 行	〃 臨時職員

凡 例

1. 本書に使用した地図は、国土地理院発行『数値地図 25,000（地図画像）宇都宮』（平成 15 年 11 月 2 刷）である。
2. 本書掲載図の縮尺は各図に示したとおりである。
3. 掲載図の方位は磁北を示す。また、水準値は調査区に面する道路面を基点水準 0 とする任意標高である。
4. 本書に記載した遺構名は発掘調査時に付したものをを使用した。

目 次

序

例言・凡例

目 次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	1
III 基本土層	4
IV 検出された遺構と遺物	4
(1) 土坑	4
V まとめ	4

写真図版

抄 録

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 遺跡周辺図	3
第3図 遺跡全体図、基本層序、1号土坑土層断面	5

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	2
-------------------	---

写 真 図 版 目 次

PL-1 遺跡全景 / 1号土坑 (SK-1) / 1号土坑 (SK-1) 土層断面 / 旧石器試掘トレンチ全景 / 基本土層 / 調査区

I 調査に至る経過

平成5年5月、児玉郡児玉町大字金屋字下別所724-1（現本庄市児玉町金屋字下別所724-1）の開発工事を計画している古家武光氏より、同開発予定地内の埋蔵文化財の所在とその取り扱いについて、児玉町教育委員会（当時）に照会があった。

児玉町教育委員会では、照会のあった開発予定地内を児玉町（現本庄市）の「遺跡分布地図」と照合したところ、周知の埋蔵文化財包蔵地であるNo.54-090遺跡（下別所遺跡）の範囲内に位置し、かつNo.54-089遺跡（枇杷橋遺跡）の隣接地であったため、照会のあった区域は、埋蔵文化財が包蔵されている可能性が認められるところから、現状を変更しようとする場合は、町教育委員会と協議するとともに埋蔵文化財の包蔵状況を確認するための試掘調査を実施し、文化財保護法の規定に則って事業を実施する旨を回答した。

その後、古家氏から試掘調査依頼書が町教育委員会に提出されたことにより日程を調整のうえ試掘調査を実施した。この結果、当該区域は比較的埋蔵文化財の包蔵は希薄であるとはいえ、平安時代堅穴住居跡などの埋蔵文化財包蔵地であることが確認され、開発予定地は「埋蔵文化財の所在が確認されたところから現状で保存することが望ましい。やむを得ず現状変更工事を実施する場合は、事前に町教育委員会とその保存措置について協議し、文化財保護法第57条の2の規定により埋蔵文化財発掘届を提出すること」などを伝達した。

なお、古家氏と町教育委員会との間で開発予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて協議したが、その途上において建物の基礎工事が着工され、現状で保存することが極めて困難な事態となったことから、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の措置をとることとなった。

発掘調査に関わる届出は、平成5年9月8日に児玉町遺跡調査会会長より、「埋蔵文化財発掘調査の届出について」が、同じく古家氏より「埋蔵文化財発掘の届出について」が、児玉町教育委員会と埼玉県教育委員会を経て、文化庁長官に提出されている。尚、埼玉県教育委員会からは、平成6年1月25日付け教文第2-185号によって発掘調査の指示通知があった。

発掘調査の実施については、児玉町教育委員会の指導に基づき、古家氏と児玉町遺跡調査会との間で、平成5年9月8日に発掘調査に関する委託契約を終結し、同9月13日から現地での発掘調査が実施された。この結果、平安時代の土師器や須恵器の細片が検出されたが、堅穴住居跡等を検出することはできず、土坑1基と多くの攪乱坑が検出されたのみであった。

（本庄市教育委員会事務局）

II 遺跡の立地と環境

本遺跡は児玉丘陵の先端部、児玉町市街地の東に位置し、地形的には北東に半島状長く延びた丘陵の先端部に立地している。周辺遺跡もこの丘陵縁辺部に数多く分布し、下原北遺跡（9）・下原南遺跡（10）では旧石器が、塩谷下大塚遺跡（3）・ウリ山遺跡（13）・真鏡寺後遺跡（8）では縄文時代前期の集落跡が、新羽根倉遺跡（7）・真鏡寺後遺跡（8）・下原北遺跡（9）では弥生時代の方形周溝墓・集落跡が、枇杷橋遺跡（2）・ミカド遺跡（4）・ミカド西遺跡（5）・新羽根倉遺跡（7）・真鏡寺後遺跡（8）・念仏塚遺跡（15）・倉林後遺跡（16）・金屋池脇遺跡（19）では古墳時代の方形周溝墓・集落跡が確認されている。

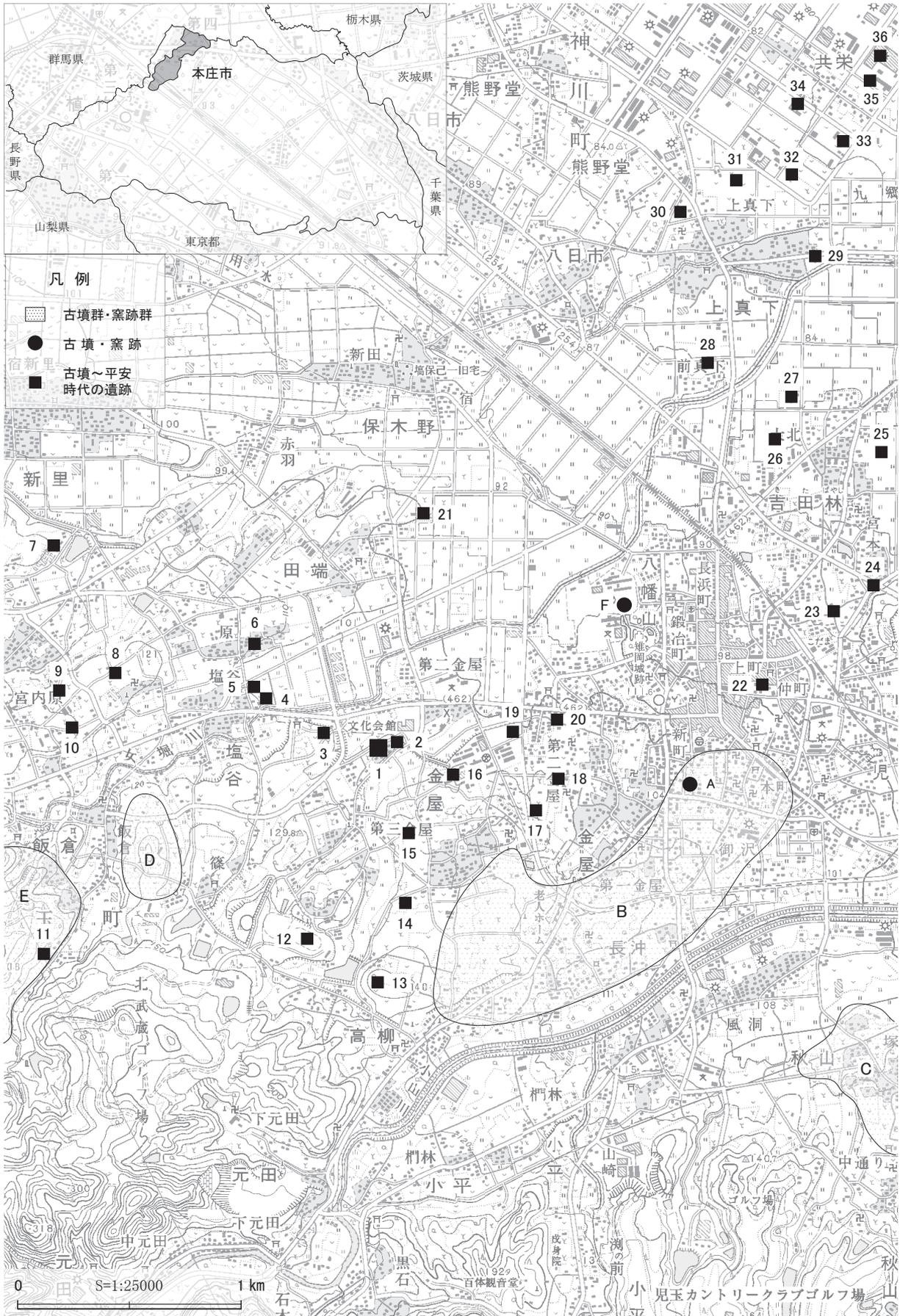
また、古墳時代前期には児玉丘陵下から北東に広がる本庄台地縁辺部、残丘上および残丘下低台地上にも集落遺跡が点在するようになり、中期以降さらに大きく集落が展開する一方、本庄台地南東の残丘上においては集落の形成が途絶え、円墳を主体とする首長層の墓が継続的に造られるようになる。後期以降も残丘上には前方後円墳・群集墳が形成され、本遺跡が立地する丘陵奥部にも飯倉古墳群（E）が認めら



第1図 遺跡位置図

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	概要	No.	遺跡名	概要			
1	金屋下別所遺跡	本報告書掲載：土坑	22	町後東遺跡	古墳時代の集落跡			
2	枇杷橋遺跡	方形周溝墓、平安時代の集落跡	23	女池遺跡C地点	本報告書掲載：奈良時代焼成土坑			
3	塩谷下大塚遺跡	方形周溝墓群、縄文・平安時代の集落跡	24	御林下遺跡	縄文・古墳・奈良平安時代の集落跡			
4	ミカド遺跡	古墳・平安時代の集落跡	25	宮田遺跡	平安時代の集落跡			
5	ミカド西遺跡	古墳・平安時代の集落跡	26	高縄田遺跡	古墳時代の集落跡			
6	横尾後遺跡	縄文・平安時代の集落跡	27	高縄田遺跡	奈良時代の溝群			
7	新羽根倉遺跡	縄文・古墳時代の集落跡	28	金佐奈遺跡	古墳・奈良平安時代の集落跡			
8	真鏡寺後遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安時代の集落跡	29	上真下東遺跡	古墳・奈良平安時代の集落跡			
9	下原北遺跡	先土器・縄文・弥生・古墳時代の集落跡	30	真下境東遺跡	奈良平安時代の集落跡			
10	下原南遺跡	先土器・縄文・弥生・古墳・奈良時代の集落跡	31	辻ノ内遺跡	奈良平安時代の集落跡			
11	飯倉窯跡遺跡	奈良時代の窯跡	32	新宮遺跡	縄文・奈良平安時代の集落跡			
12	峯別所遺跡	縄文時代の集落跡	33	塚島遺跡	旧石器、古墳・奈良平安時代の集落跡			
13	ウリ山遺跡	縄文・古墳時代の集落跡	34	南共和遺跡	奈良平安時代の集落跡			
14	高柳原遺跡	古墳・奈良平安時代	35	古井戸南遺跡	縄文・古墳・奈良平安時代の集落跡			
15	念仏塚遺跡	古墳・奈良平安時代の集落跡	36	古井戸遺跡	旧石器、縄文・古墳・奈良平安時代の集落跡			
16	倉林後遺跡	古墳・奈良平安時代の集落跡	古墳一覧表					
17	倉林東遺跡	縄文・古墳・奈良平安時代の集落跡						
18	金屋西遺跡	弥生・古墳・奈良平安時代の集落跡	No.	古墳名	No.	古墳名	No.	古墳名
19	金屋池脇遺跡	古墳・奈良平安時代の集落跡	A	長沖14号墳	C	秋山古墳群	E	児玉古窯跡群
20	金屋北原遺跡	古墳・奈良平安時代の集落跡	B	長沖古墳群	D	飯倉古墳群	F	八幡山埴輪窯跡
21	十二天遺跡	古墳・平安時代の集落跡						



第2図 遺跡周辺図

れる。

奈良時代に入ると、7世紀中葉以降に沖積地を取り囲むように分布した集落がさらに範囲を広げ、本庄台地縁辺部では真下境東遺跡(30)・辻ノ内遺跡(31)・新宮遺跡(32)・南共和遺跡(34)・古井戸遺跡(36)など带状に連続する広大な居住域が9世紀まで断続的に営まれるようになる。その後、9世紀後半になるとこうした状況は一変し、変わって自然堤防上に小規模な集落が形成されるようになる。一方、残丘上および残丘下低台地上の集落は10世紀以降も集落が数多く形成されている。なお、児玉丘陵奥部には武蔵国分寺貢納瓦を出土した飯倉窯跡(11)が認められる。

Ⅲ 基本土層

本遺跡の基本層序は調査区南壁中央部で観察された。表土(第Ⅰ層)はAs-Aを多量に含み、第Ⅱ・Ⅲ層はローム二次堆積を主体とする。第Ⅳ層以下はローム層でAs-YP・As-BP・AT等の軽石層・火山灰含有層が認められる。

遺跡はこうしたローム層が厚く堆積する丘陵上に立地し、遺構は第Ⅲ層のAs-YPブロック含有のローム前位層上面で検出された。

Ⅳ 検出された遺構と遺物

土坑1基と多数の攪乱(根穴等)が検出された。遺物は出土していない。

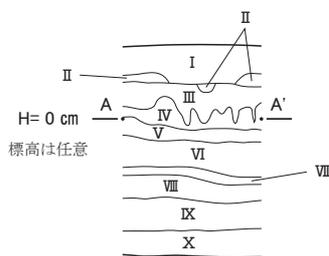
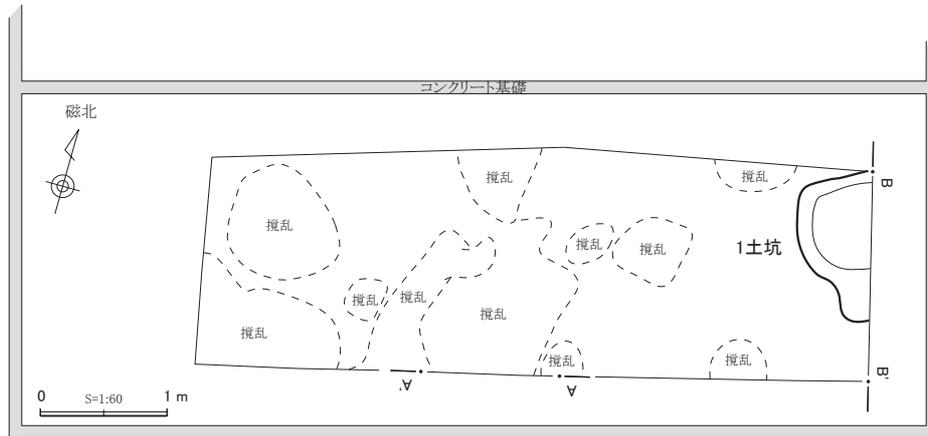
(1) 土坑

1号土坑(SK-1)

位置 調査区東端部に位置する。**形状・規模** 東1/2程度が調査区外へ広がっているが、確認状況において平面は瓢箪形を成し、壁は外傾する。長軸(南北)118×短軸(東西)60×深さ40cm程を測る。**覆土** ローム粒含有の黒色土を主体とするが、自然か人為堆積かは判断し難い。**遺物** 出土遺物なし。**時期** 時期不明。

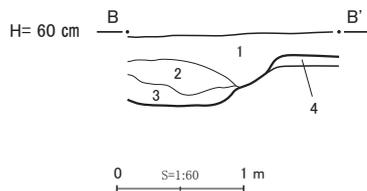
Ⅴ まとめ

金屋下別所遺跡は、調査地点の南西約100m付近の同一支丘上に、古墳時代前期の方形周溝墓群の存在がソイルマークによって確認されており、隣接する支丘である塩谷下大塚遺跡の方形周溝墓群の占地と対比し得るものである。本調査地点においても、方形周溝墓群の外延部が検出される可能性を想定しながら試掘および発掘調査を実施したが、試掘調査において平安時代の堅穴住居跡の一部が確認されたのみで、方形周溝墓群は本地点まで伸びていないことが明らかとなった。むしろ、隣接する枇杷橋遺跡の南斜面側において平安時代の集落跡が検出されているところから、本調査地点はこの集落の外延部として捉えられる可能性がある。しかし、今回の調査地点は建物基礎工事によって住居跡の存在も不明となり、確認することができなかったことは残念であった。



基本層序

- 第I層 暗灰褐色土。As-A（軽石）非常に多く含む。攪乱。
- 第II層 茶褐色土。ローム二次堆積土。
- 第III層 茶褐色土。ローム二次堆積土主体であるが、IV層ブロックを多く含む。前位層。
- 第IV層 黄色土。As-YPを含む。
- 第V層 黄色土。第IV層に類似するが、色調やや明るくAs-YPが少ない。
- 第VI層 暗黄色土。炭化物の微粒子を多く含む。
- 第VII層 橙褐色土。As-BP層。
- 第VIII層 暗灰色土。キメの細かいシルト質粘質土。AT？
- 第IX層 灰茶褐色土。鉄・マンガンが縦位に入り、平面は甲羅状を成す。
- 第X層 明白色土。キメの細かいシルト質粘質土上面は鉄・マンガン層1～5mmの厚さで見られる。



1号土坑土層説明

- 第1層 暗灰色土。締まり、粘性なし。As-A（軽石）を多く含む。
- 第2層 暗褐色土。締まり、粘性若干あり。ローム粒を若干含む。
- 第3層 黒色土。締まり、粘性若干あり。ローム粒を若干含む。
- 第4層 茶褐色土。締まり、粘性あり。ローム二次堆積土。

第3図 遺跡全体図、基本層序、1号土坑土層断面

写真図版



遺跡全景 東から



1号土坑 (SK-1) 南から



1号土坑 (SK-1) 土層断面 西から



旧石器試掘トレンチ全景 東から



基本土層 北から



調査区 南東から

報告書抄録

フリガナ	カナヤシモベッショイセキ 2		
書名	金屋下別所遺跡Ⅱ		
副書名	A地点の調査		
シリーズ	本庄市遺跡調査会報告書	巻次	第25集
編著者	太田博之・笠原仁史		
編集機関	本庄市遺跡調査会		
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 TEL 0495-25-1185		
発行日	西暦2009年(平成21年)3月13日		

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査	調査
		市町村	遺跡	(° ' ")	(° ' ")		面積	原因
カナヤシモベッショ 金屋下別所 イセキ 遺跡 (A地点)	ホンジョウ シ コダマチョウ 本庄市児玉町 カナヤシモベッショ 金屋下別所 724-1	112119	90	36° 11' 18"	139° 06' 52"	19930913 } 19931030	10m ²	住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金屋下別所 遺跡 (A地点)		不明	土坑	出土遺物なし	

要約	時期不明の土坑が1基確認されたのみである。
----	-----------------------

本庄市遺跡調査会報告書 第25集

金屋下別所遺跡Ⅱ

－ A 地点の調査 －

平成21年3月5日 印刷

平成21年3月13日 発行

発行／本庄市遺跡調査会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号
本庄市教育委員会内

電話 0495-25-1185

印刷／朝日印刷工業株式会社